

# On Distribution of Tombs of Smallpox Victims in, Hasami Town, Nagasaki Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nogami, Takenori, Jia, Wenmeng メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00066111">https://doi.org/10.24517/00066111</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 長崎県波佐見町の「疱瘡墓」の分布について

野上 建紀・賈 文夢

(長崎大学)

### はじめに

1980年5月8日にWHO(世界保健機関)は地球上からの天然痘根絶宣言を発した。人類史上、ほぼ唯一、根絶に成功した感染症とも言われる。天然痘の正確な起源は不明であるが、旧大陸では紀元のはるか以前より存在し、流行を繰り返しており、大航海時代以降は新大陸にも流行が広まり、免疫のなかったアメリカ大陸の先住民に甚大な被害を与えた。感染症の元となるウイルスや細菌は、大陸を横断する「陸の道」、大洋を渡る「海の道」を移動する人々に乗り移り、その流行範囲を地球規模に拡大させてきた。

日本では大陸から渡来人が盛んに海を越えてきた6世紀に最初の天然痘のエピデミックが起こったとされる。「痘瘡」、「疱瘡」などとよばれ、古文書などでは「痘」とのみ記されていることもある。江戸時代にも各地でたびたび流行し、さまざまな対策が取られていた。現在の長崎県の一部にあたる旧大村藩では徹底的な隔離政策が行われたことが知られている。天然痘ウイルスに感染し、発病すると人里離れた隔離施設(疱瘡小屋・疱瘡所・山小屋など)に隔離され、治療の甲斐なく亡くなると、やはり一般の墓地とは離れた土地に埋葬され、それらは「疱瘡墓」とよばれた。そうした生前、死後の隔離は、天然痘の予防接種である種痘が普及して、天然痘に対する脅威が小さくなり、恐怖が薄れるまで続けられた。

疱瘡小屋や疱瘡墓は、もともと訪れる人々も限られており、忌避された存在として、人々の記憶や記録も乏しい。そのため、その正確な場所すらわからないものが多いが、2020年に長崎県波佐見町(図1)の中尾郷の墓地の悉皆調査を行う過程で、二つの疱瘡墓の調査を行うことができた。その内の一つは道もないような山中であったが、古い地籍図(図2)を手がかりに現地籍図、地形図と比較しながら辿り着くことができたものである。そこで本論では主に古地籍図から疱瘡墓の位置を推定し、その分布を考えてみたい。

### 1「疱瘡墓」発見の経緯

大村・五島・天草などでは天然痘に罹患すれば、その患者は人里離れた山中や海岸、離島などに隔離され、そして、治療あるいは遺棄された。そして、亡くなると隔離された場所に埋葬された。五島市前島の山口倫十郎墓(図3)や長崎市大浜町の福田長兵衛墓などのように今なお地元で墓地として知られているものを除いて、多くの疱瘡墓は隔離場所であるため、もともと訪れる人間も限られており、その後も人が寄りつくことがなく、忘れられることが多い。

そして、場所が定かでなくなったり、忘れられた疱瘡墓が再び発見されることがある。その経緯はさまざまであり、いくつか事例を次に挙げる。

西海市柴山の疱瘡墓(図4)は、後世の土地開発によって発見されたものである(賈2022a)。隔離地となるような辺鄙な土地まで開発が進んだ結果であろう。

大村市雄ヶ原黒岩墓地は平成11年(1999)に道路の拡幅工事によって発見されたものである。発見の翌年発掘調査が行われている(大村市史編さん委員会編2017)。また、時津町元村郷の疱瘡墓(図5)は1980年に始まった長崎漁港臨港道路の建設工事によって墓地の丘が切り崩され、墓石や人骨が出土している(犬塚2017)。現在、墓石は石垣の一部に利用された他、一箇所に寄せられている(野上・賈・石橋・田中2022)。

五島市の南河原(図6)は古文書に疱瘡による死者を埋葬したことが記されており、慰霊碑が建てられているものの、墓の所在が不明となっていたものである。2021年の現地踏査によって確認された(野上・賈・石橋2022)。そして、疱瘡小屋の存在が疱瘡墓の場所まで導いた例が天草市貢山の疱瘡墓である(松本1981)。

波佐見町の中尾郷の白岳(図7)と葉山(図8)の二つの疱瘡墓は、前に述べたように近世墓の悉皆調査

によって確認されたものである。長崎大学多文化社会学部の野上研究室では、2020年に波佐見町の中尾郷の文化的景観の基礎調査の一環として、墓地の悉皆調査を行なった。この調査では明治23年(1890)の古地籍図を用いた。古地籍図では6ヶ所の土地が墓地として色分けされており(野上・賈2021a)、色分けされた墓地の中で集落から離れた位置の墓について最新の地籍図の地番と地形図を重ね合わせて位置を特定し、瘡瘡墓に辿り着いた(野上・賈2021b)。白岳の瘡瘡墓の方は定期的に清掃されているようであり、地元の人々によって管理されていることがわかるが、葉山の瘡瘡墓の方は道らしきものもなく、全くの荒れ墓となっていた。同じ波佐見町の田ノ頭郷の裏ノ谷の墓地(図9)も古地籍図を頼りに辿り着いた瘡瘡墓である。一方、同じ波佐見町の折敷瀬郷の東舞相の瘡瘡墓(図10)は地元の聞き取り情報により特定できたものである。

以上のように、瘡瘡墓の発見は、偶発的なことが多い。その他、瘡瘡墓の位置を特定するための手がかりには、古文書の記述、地元の聞き取り情報などがあるが、古文書の記述は概しておおまかであり、詳細が記されていることは少ない。また、聞き取り情報は重要な手がかりとなるが、実際に訪ねた証言ではなく、地元での言い伝えのレベルのものも少なくない。そもそもその「地元」を特定するまでの情報が乏しい。

その中で有効な手がかりと方法とみられるのが、波佐見の中尾郷で行なった古地籍図とその読み取りである。古地籍図から墓地の立地や環境を読み取り、瘡瘡墓の可能性のある土地を探し出す方法である。「地元」を特定できるので、聞き取り調査も行えるし、国土調査(地籍調査)が完了している場合、土地の地番からほぼ正確に現地を特定することができる。墓地調査にあたって承諾が必要な土地所有者の情報も同時に得られる。

## 2 古地籍図から推定する瘡瘡墓の分布

### (1) 明治期の地籍図に記録された墓地

江戸期の波佐見町は波佐見村と称されていた。明治期に入り、川棚川上流域の上波佐見村と下流域の下波佐見村に分かれたが、昭和31年(1956)には再び合併し、波佐見町となっている。そして、村は「郷」(図11)に分かれ、さらに「小字(字)」(図12)に分かれる。

現在の町域はおおむね江戸期の村域と一致するが、

南側に隣接する川棚村(現、川棚町)との間に一部移転編入が行われている。例えば、岳辺田郷の梅高野は川棚村から編入されたものであり、逆に中山郷は一部(平野郷)を除いて川棚町に編入されている。

そして、前に述べたように波佐見町教育委員会には、波佐見町域の明治23年(1890)の地籍図が残されている。野々川、村木の2つの郷のものが欠損しているが、その他の18の「郷」のものが残されている<sup>(1)</sup>。本図と副図があり、各郷のそれぞれの字一つに対し、1枚の本図がある。すなわち、小樽郷の29字、永尾郷の45字、三股郷の18字、中尾郷の8字、鬼木郷の27字、井石郷の37字、湯無田郷の22字、金屋郷の47字、折敷瀬郷の24字、宿郷の22字、田ノ頭郷の39字、川内郷の38字、岳辺田郷の30字、皿山郷の23字、稗木場郷の30字、長野郷の57字、志折郷の37字、平野郷の8字の計541字の541枚の本図がある。地籍図では土地が一筆ずつ地目ごとに色分けされており、それによると191筆の土地が墓地として紫色に塗られている。ほとんどが近世から続く墓地と見られ、およそその近世の墓地の分布状況を知ることができる(図11~13)。一つの郷について2~25筆(平均10.6筆)の墓地が存在していたことがわかり、最も墓地が少ない郷は鬼木郷や三股郷の2筆、最も墓地が多い郷は田ノ頭郷の25筆である。しかしながら、複数筆の土地で一つの墓地を形成しているものもあり、墓地数とは一致しない。

この地籍図から一般的な墓地の立地条件を知るために、衛星画像(Google Earth Pro、以下同)との比較を行った。古地籍図にあり、かつ衛星画像で確認できる墓地は山中に埋もれたものではなく、近世から現代に至るまで集落と関わりを持ち続けてきた墓地と推定されるからである。以下、地籍図に記載されている墓地の中で衛星画像で確認できるものを中心に墓地の分布状況を郷毎に見ていく。

### ① 旧上波佐見村

#### (小樽郷)

川棚川の上流と支流の小樽川流域にあり、野々川郷や永尾郷とともに、波佐見町の東側の町境に位置している。地籍図では10筆の墓地が確認できる。その内、6ヶ所の墓地が衛星画像によって確認できる。墓地の多くは小樽川の右岸の斜面や谷に分布している。

(永尾郷)

川棚川上流の永尾川流域、三股川流域に位置している。地籍図では10筆の墓地が確認できる。その内、6筆の墓地が衛星画像によって確認できる。永尾川と三股川の合流点よりやや遡った地点に規模の大きな墓地がある他、川の流域に分布している。

(三股郷)

川棚川上流に位置し、永尾郷の西側にある。永尾郷、中尾郷とともに江戸時代に窯業で栄えた集落である。中尾山と同様に人口密集地であったが、確認されている墓地は2ヶ所だけである。その内、1ヶ所は衛星画像で確認できる。しかし、墓地はその人口に見合うだけの規模はない。狭隘な土地であったため、墓地よりも居住空間や生産空間が優先されたとみられる。もともとは永尾郷の一部であったため、墓については永尾郷の墓地を利用していた可能性がある。

(中尾郷)

井石川上流の中尾川流域に位置し、三股郷と鬼木郷に挟まれた谷にある。地籍図では6筆の墓地が確認できるが、2020年度に行った悉皆調査では5ヶ所の墓地が確認されている(野上・賈 2021a)。すでに1筆の墓が消滅している。その内、主な3ヶ所の墓地(上中尾1ヶ所、赤井倉2ヶ所)は集落の成立と拡大とともに順次、墓地が築かれたと考えられる。現地を確認された残り2ヶ所は瘡瘡墓である。

(鬼木郷)

井石川上流の鬼木川流域に位置している。地籍図では2筆の墓地が確認されている。現況も同様である。墓地は井石川の支流の合流点付近の丘陵上と谷奥の尾根上に位置している。

(井石郷)

井石郷は井石川流域の中尾郷と鬼木郷の下流域に位置している。地籍図では22筆の墓地が確認されている。その内、17ヶ所の墓地が衛星画像で確認できる。中尾郷につながる谷筋に3ヶ所、鬼木郷につながる谷筋に7ヶ所の墓地があるほか、残りは二つの川の合流地点に集中している。

(湯無田郷)

井石郷の北側、小樽郷や野々川郷の下流域に位置している。地籍図では11筆の墓地が確認されている。その内、7ヶ所の墓地が衛星画像で確認できる。消滅したとみられる墓地も1ヶ所ある。墓地の多くは川棚川の右岸に分布している。

(金屋郷)

川棚川の支流の金屋川流域に位置している。地籍図では15筆の墓地が確認されている。その内、8ヶ所の墓地が衛星画像で確認できる。金屋の谷の入り口付近に比較的集まっているが、山中にあるものも少なくない。

(折敷瀬郷)

金屋郷の北側に位置している。地籍図では8筆の墓地が確認されている。その内、5ヶ所の墓地が衛星画像で確認できる。地籍図では川棚川の上流の田別当川沿いには墓地が確認されておらず、多くは郷内中央部の平野と丘陵の境付近に位置している。

(宿郷)

折敷瀬郷の西側にあたり、波佐見町のほぼ中央部に位置している。川棚川の右岸にあたる。地籍図では8筆の墓地が確認されている。その内、5ヶ所の墓地が衛星画像で確認できる。開発等によりすでに消滅したとみられる墓もある。郷の中央部に規模の大きな墓地がある。

②旧下波佐見村

(田ノ頭郷)

宿郷の南側、川棚川の左岸に位置している。地籍図では25筆の墓地が確認されている。その内、11筆の墓地が衛星画像で確認できる。衛星画像で確認できないものの民家の近くに位置していることがわかる墓地が8筆、民家からやや離れた山林にある墓地が6筆確認できる。墓地の大半は川棚川左岸の平野に接した丘陵に立地しており、特に隣接する金屋郷との境界近くに多く存在している。

(川内郷)

川棚川の左岸、田ノ頭郷の下流側に位置している。地籍図では19筆の墓地が確認されている。その内、

衛星画像で12筆の墓地が衛星画像で確認できる。衛星画像で確認できないものの民家に隣接した場所であることがわかる墓地が2筆あり、圃場整備で消滅したとみられる墓地もある。墓地の多くは川棚川の支流の川内川流域に位置しており、山林の中に存在する墓地も4筆あり、その中の2筆の墓地は隣町の川棚町との境界付近に位置している。

#### (岳辺田郷)

川棚川の左岸、川内郷の下流側に位置している。地籍図では9筆の墓地が確認されている。その内、7筆の墓地が衛星画像で確認できる。圃場整備で消滅したとみられる川岸の墓地もある。墓地は川棚川左岸の平野に接する丘陵に多く分布している。

#### (皿山郷)

川棚川の支流の村木川に合流する皿山川の上流域、佐世保市との市町境付近に位置している。地籍図では5筆の墓地が確認されている。墓地は皿山川の両岸に分布している。

#### (稗木場郷)

皿山川の皿山郷の下流側に位置している。地籍図では6筆の墓地が確認されている。その内、5筆の墓地は衛星画像でも確認できる。墓地は皿山川の両岸、川棚川の右岸に主に分布している。

#### (長野郷)

現在の甲長野・乙長野・協和郷の3つの郷に該当する。川棚川の右岸、岳辺田郷の対岸にあたり、川棚川の支流の長野川の流域に位置している。地籍図では23筆の墓地が確認されている。その内、15筆の墓地が衛星画像で確認できるが、消滅しているとみられる墓地も多い。墓地は長野川の流域に比較的広く分布している。

#### (志折郷)

長野郷の下流側に位置し、志折川流域にあたる。地籍図では9筆の墓地が確認されており、その内、7筆の墓地が衛星画像で確認できる。墓地は川棚川右岸の平野部に多く分布するが、一部は集落から離れた山中にも存在する。

#### (平野郷)

中山郷の一部であったが、中山郷は波佐見町と川棚町の間で分郷し、大半が川棚町となっている。その際に波佐見町に残った地区が平野郷である。地籍図では1筆の墓地が確認されており、衛星画像でも確認されている。

#### (2) 墓地の立地

2020年に墓石の悉皆調査を行った中尾郷では、主要3ヶ所の墓地はいずれもその成立時期の集落を見下ろす丘上に位置していた。その内、2ヶ所の墓地は本来、集落の外側や外縁に形成されていたが、集落の拡大に伴い、集落に飲み込まれている。2021年に調査を行った鬼木郷の2ヶ所の墓地の内、一つは中尾郷と同じく集落を見下ろす場所にあり、もう一つは二つの集落の間に位置している。

そして、川沿いに民家が点在する場合、人家の背後に立地している墓地が多い。例えば、岳辺田郷の墓地(岳辺田郷546・547・576・666・1011・1216など)は川棚川の左岸の山地の裾に一定の間隔を置きながら配置されている。同様の墓地の並びは金屋郷や井石郷、湯無田郷、小樽郷でも見られる。

小字の境界付近に墓地が作られることも少なくなく、複数の小字で共有するような形で墓地が形成されているものもある。例えば、長野郷には片平山、尾形ノ尾、蟻迫の3つの小字にまたがる墓地(長野郷1314・1316・1317・1386・1387)もある。

二つの郷が接する山中に墓地が点在している箇所もある。金屋郷と田ノ頭郷の間にある墓地(金屋郷602・632、田ノ頭郷1624・1628・1630・1665・1670)である。

また、平野部の民家が数多く見られる集落には規模の大きい墓地が形成されている。例えば、井石郷や湯無田郷などの墓地(湯無田郷1247、井石郷1780)である。この墓地も二つの郷にまたがっている。墓地は集落の発展とともに拡大しており、墓地は集落の姿を反映している。

拡大した集落に囲まれて、集落との本来の距離感を失っている墓地もあるが、元来、集落と一定の距離を保った状態で墓地は存在している。墓は集落の内にはつくらないものの、集落によって継続的に使用し、維持される。そのため、当然のことながら集落と無関係に存在しているわけではない。

### (3) 波佐見町内の各郷における疱瘡墓推定地

本来、墓は集落と切り離れたものでも無関係に存在するものではないことを述べたが、中には集落と全く隔絶された位置に存在する墓地もある。その一つが疱瘡墓である。むしろ集落と隔絶しているがゆえにその場所が選ばれている。

これまで波佐見町内で発見されている疱瘡墓とみられる墓は、中尾郷の白岳と葉山、折敷瀬郷の東舞相、田ノ頭郷の裏ノ谷の4ヶ所である。まずそれぞれの墓地が記された地籍図を観察してみる。現在でも比較的管理が行われている白岳墓地は地籍図上、周囲を林や田に囲まれており、道路も通じている(図2)。葉山墓地は山林内が細かく分筆されているが、集落の中心からはもちろん集落の周縁に位置する宅地からも遠く、直接道も通じていない(図2)。折敷瀬郷の東舞相墓地は山林の中の墓地が湖に浮かぶ小島のように描かれており、民家からも離れている。また、道も通じていない(図14)。田ノ頭郷の裏ノ谷墓地については古地籍図を頼りにたどり着いたものの、候補となる土地が複数あり(図15)、まだ確定していない。

現況はいずれも宅地から離れた山中にあることは共通しているが、白岳348墓地は比較的近くまで道が通じている。荒れてもおらず、墓標も立派である。被供養者の一人は登り窯の開窯や経営に関わったり、地元の大神宮の石碑にも寄進者として氏名が彫られている人物であり、地元では有力な一族の墓であったと推定される。そのため、後世まで管理が続いたのであろう。現在、発見されている中では最も古い没年の疱瘡墓であり、時代によって集落との隔絶の度合いが異なるのかもしれない。

以上のことを参考に明治23年(1890)の地籍図に墓地として塗り分けられた土地について、衛星画像で山中にあることを確認しながら、疱瘡墓の可能性のあるものを抽出してみたいと思う。

まず距離的に大きく集落から離れている墓地を挙げる。小樽郷の浦山墓地(図16)、川内郷の中川内墓地(図17)と二度川内墓地(図18)、志折郷の藤ノ尾墓地(図19)などは市町境に近い山中に位置している。これらは疱瘡墓など特殊な墓である可能性が高い。湯無田郷の山中谷墓地も集落からかなり離れた位置にあるが、近くに民家がある。集落から離れている場合であっても宅地に近接している墓地は、その宅地の縁者

の一般的な墓地である可能性がある。

次に衛星画像で確認しながら、周囲の環境から疱瘡墓の可能性をもつその他の墓地を郷毎に挙げていく。なお、墓地の名称については便宜的に小字名を用いている。

#### ①旧上波佐見村

##### (永尾郷)

三股川上流の永尾郷から三股郷に抜ける道沿いの山中に江平原墓地がある。疱瘡墓である可能性もあるが、道沿いに位置している。

##### (三股郷)

三股郷から永尾郷に抜ける道沿いの山中に太田越墓地がある。疱瘡墓であるかもしれないが、少し離れた場所に民家もある。

##### (井石郷)

山林の中にある墓地を複数箇所、確認できる。岩ノ下墓地、鉛山墓地、城ノ下墓地の3ヶ所である。岩ノ下墓地は中尾郷との境界付近の山中に位置しており、地籍図においても周囲から孤立しているように見え(図20)、疱瘡墓である可能性を考えることができる。一方、鉛山墓地や城ノ下墓地も山林の中に位置しているが、前者は一般墓地が近くにあり、後者は民家が近い。

##### (金屋郷)

山林の中にある墓地を複数箇所、確認できる。須田ノ木墓地、山中谷墓地、木場山墓地、大久保墓地の4ヶ所である。須田ノ木墓地は正確な位置が不明であるが、民家からかなり離れており(図21)、疱瘡墓である可能性が考えられる。山中谷墓地は深い山中にあるものの民家も近くにある(図22)。木場山墓地は山林の中にある墓であるが、奥まった場所にあるわけではない。大久保墓地は田ノ頭郷との境界付近の山林に位置する墓地である。田ノ頭郷側の山林にも複数の墓地がある。

##### (宿郷)

山林の中に1ヶ所、墓地を確認することができる。馬四郎墓地である。周囲の開発が進んでおり、かつて

の様子はいかがい知れない。その他、衛星画像で猪狩池の中に石碑を確認することができる。地籍図にあるスゲ田の墓地とみられる。

## ②旧下波佐見村

### (田ノ頭郷)

山林の中に6ヶ所の墓地群を確認することができる。その内、5ヶ所は金屋郷との境界付近に位置するもので、裏ノ谷と井手ノ平にまたがる墓地であり、山林の中に点在している。そのうちの一つの裏ノ谷墓地が疱瘡墓とみられることは前に述べたとおりである。井手ノ平墓地は墓地に至る道も通じておらず、地籍図をみると折敷瀬郷の東舞相の疱瘡墓の表示に似ている(図24)。残る1ヶ所は大谷墓地であり、この墓地もまた山林の中に埋もれたように存在している。民家からも遠い。よって、井手ノ平墓地や大谷墓地も疱瘡墓である可能性が考えられる。

### (川内郷)

中川内墓地や二度川内墓地以外に2ヶ所の墓地を山林の中に確認することができる。古川墓地である。山林の中ではあるが、道に接している。

### (岳辺田郷)

山林の中に孤立した形の墓地が1ヶ所ある。梅ノ高野墓地である(図23)。地籍図をみると折敷瀬郷の東舞相の疱瘡墓の表示に似ており、同じく疱瘡墓である可能性が考えられる。

### (皿山郷)

山林の中に墓地が1ヶ所ある。火口墓地である。地籍図をみると折敷瀬郷の東舞相の疱瘡墓の表示に似ており(図25)、同じく疱瘡墓である可能性が考えられる。

### (稗木場郷)

現在の山林の中に墓地は見当たらないが、地籍図には山林の中に孤立した形で下谷墓地が描かれている。折敷瀬郷の東舞相の疱瘡墓の表示に似ており、同じく疱瘡墓であった可能性が考えられるが、周囲の開発が進んでおり、すでに消滅しているかもしれない。

### (志折郷)

藤ノ尾墓地の他に1ヶ所、山林の中の墓地を確認することができる。城ノ下墓地である。ただし、道が通じている。

以上のことから、地籍図と衛星画像を分析した結果、おおむね一つの郷について1~2ヶ所の疱瘡墓の可能性をもつ墓を確認することができた。その中でも疱瘡墓である可能性が比較的高い墓地は、小樽郷の浦山墓地、井石郷の岩ノ下墓地、金屋郷の須田ノ木墓地、川内郷の中川内墓地・二度川内墓地、志折郷の藤ノ尾墓地、田ノ頭郷の井手ノ平墓地、岳辺田郷の梅ノ高野墓地、皿山郷の火口墓地などである。その他、宿郷の馬四郎墓地、稗木場郷の下谷墓地などは疱瘡墓であった可能性があるが、開発等によって消滅しているかもしれない。

今回、地籍図が存在する郷の中で、長野郷や鬼木郷では疱瘡墓の可能性をもつ墓を確認できなかったが、明治23年の時点ですでに墓地として認識されていなかったものもある可能性がある。そのため、郷ごとに疱瘡墓が存在した可能性を否定するものではない。

## 3 疱瘡墓と疱瘡小屋

江戸時代の太村領内では「山揚げ」と称して天然痘患者を隔離する施設として、疱瘡小屋(山小屋)が設けられた。太村市雄ヶ原黒岩墓地は、種痘医の芳陵栄伯が文政8年(1825)に開いた菖蒲谷種痘所のすぐ下手に位置している。そして、この種痘所が建てられる前は長年にわたり疱瘡所が設けられていた。太村市雄ヶ原黒岩墓地は墓標の刻年によれば、少なくとも延享2年(1745)から弘化3年(1846)までの長期間に及んでおり、疱瘡所時代から治療の甲斐なく、亡くなった人々の埋葬地と考えられる。

諫早市多良見町の旧伊木力村船津郷(旧太村藩領)の『円満寺過去帳』には、天保5年(1834)の疱瘡患者について「右疱瘡似容に付山墓所に取り置き書物出す」という書き込みがあるという(太村市史編さん委員会(編)2017)。つまり、死亡した患者が疱瘡に似た容姿であるため山中の墓所に埋葬し、その旨の書物(報告書)を差し出したという。これについて久田松和則は山中の疱瘡患者隔離施設で死亡したために、そ

のまま近くの山中墓所に埋葬されたものと解釈している<sup>(2)</sup> (大村市史編さん委員会 (編) 2017)。

前に少し触れたが、天草地方の高浜の貢山では疱瘡小屋の近くに疱瘡墓が確認されている (松本 1981)。1980 年代当時に確認された石垣などから推定すると、貢山の疱瘡小屋は大規模なものであった。付近で発見されている墓群との距離は 35 メートルである (図 26)。2022 年の現地踏査では、小屋跡の近くに別の疱瘡墓も確認できた。なお、貢山の疱瘡小屋とみられる場所は 1960 ~ 1970 年代に撮影された航空写真では植生の違いを認識することができる (図 27)。周囲との土地利用の違いが反映されている可能性がある。

また、天草の高浜村の庄屋の『上田宜珍日記』の中の文化 5 年 (1808) 1 月 29 日の日記に次のように記されている。

「一白木河内與茂七何病とも不相分候而相果候由之処  
地腫レ致シ赤色ニ而有之候故 当時柄為念外平へ遣  
シ葬せ致段村方会所へ申出候由 今晚ヤブサ越へ椎  
葉川土手通八幡江はた川中白洲ヲ打越候而外平へ遣  
候筈山入之者共へ申渡候積り会所申出ル」

文化 5 年は前年の暮れから疱瘡が大流行しており、そうした時世の中、白木河内の與茂七が不明の病で死去した際、念を入れて外平へ遺体を送って葬りたいと申し出ている。当時、外平には疱瘡小屋が置かれていたが、死去した後のことであるため、治療を施す必要はなく、埋葬するだけであるため、外平には疱瘡小屋だけでなく、疱瘡墓もあったとみるべきであろう。

以上のように、疱瘡小屋 (山小屋) と疱瘡墓はセットである場合が多く、大村や天草の例をみると、両者は近接した位置にある。それぞれの役割を考えると、合理的な配置であろう。言い換えれば、疱瘡小屋の跡地を特定すれば、疱瘡墓の位置を推定できることになる。

そこで波佐見における疱瘡小屋についてみる。『波佐見史上巻』によれば、疱瘡小屋は鴻巣山麓の火葬場があった所にもあった (波佐見史編纂委員会 1976)。しかし、地籍図をみると鴻ノ巣に疱瘡墓とみられる土地は確認できない。一方、古地籍図を観察し、前掲の疱瘡墓の可能性のある墓地の付近の山中に不自然な宅地の表記がないか探してみたが、確実な例を発見することはできなかった。そして、『波佐見史上巻』には、疱瘡にかかるとすぐにこの小屋に送られ

て介抱を受けたが、看護の不備と医術の幼稚不完全によって非命の死を遂げた者が多く、町内の各所の山中にその墓が点在しているとある (波佐見史編纂委員会 1976)。すなわち、波佐見では疱瘡小屋と疱瘡墓が必ずしもセットにはなっておらず、死後は疱瘡小屋の近くに埋葬されるのではなく、それぞれの郷の疱瘡墓に埋葬された可能性が考えられる。もちろん、それぞれの郷に小規模な疱瘡小屋と疱瘡墓がセットであった可能性は残る。あるいは『九葉実録』に元禄元年 (1688) に波佐見で天然痘が流行した際のこととして「郷里ヲ限テ家ニ在テ療セシム」 (大村史談会編 1994) とあるように「山揚げ」自体が行われないこともあったと見られる。

現在、確認されている波佐見町内の疱瘡墓の墓地 1ヶ所あたりの墓の数は、雄ヶ原黒岩墓地の 85 基以上、時津町元村郷の墓地の 68 基以上に比べると非常に少ない。雄ヶ原黒岩墓地の被葬者の居住地が広範囲に及んでいるのに対し、波佐見の中尾郷や折敷瀬郷の疱瘡墓は確認された墓石も少なく、面積や規模も小さい。おおむね一つの郷について 1 ~ 2ヶ所の疱瘡墓の可能性をもつ墓があることから、おそらく郷内の死亡者のみ埋葬供養されたのではないかと推定される。

#### 4 いわゆる「迷惑施設」と疱瘡墓

天草の貢山の疱瘡小屋は、明治 19 年 (1886) に高浜でコレラが大流行した時にコレラ患者を多数隔離したとも言われている。この隔離施設は、明治 28 年 (1895) に御所里 (通称首越) に建てられた新しい伝染病舎 (避病院) に引き継がれるが、昭和 29 年 (1954) にこのいわゆる首越の避病院の廃屋の跡地に火葬場が建設されている (松本 1981)。また、西海の柴山宝塔が建立された付近も「避病院」であったとされる (西海町教委 2005)。

波佐見でも鴻巣山麓の疱瘡小屋の跡地に火葬場が建設されており、跡地はその地理的位置や環境からいわゆる「迷惑施設」として利用された例も多いのではないかと推測される。言い換えれば、現在の「迷惑施設」の前身を辿れば、かつての疱瘡墓あるいは疱瘡小屋に行き着く可能性がある。

#### おわりに

本論では、主に古地籍図をもとに疱瘡墓の可能性



が高い墓地を抽出していった。その結果、郷ごとに疱瘡墓が存在した可能性が高く、被葬者の住居していた範囲はおそらく郷内にとどまると考えられる。同じ大村藩の他の疱瘡墓とは異なっており、疱瘡墓のありかたは同じ藩内であっても地域によって異なることが考えられる。

今後は抽出した墓地の現地調査を進め、疱瘡墓かどうか確認していく作業が必要となる。そして、この探索方法の有効性が確認できれば、波佐見以外の他地域でも同様に古地籍図を用いて、疱瘡墓や疱瘡小屋を見つけ出すことができると考える。

近世の疱瘡に関する研究は少なくないが、幕末の種痘普及以前の疱瘡対策に関する研究は少ない(東2009)。疱瘡小屋やそれに伴う疱瘡墓にまつわる研究もまた少ない。冒頭でも述べたが、疱瘡小屋や疱瘡墓は、もともと訪れる人々も限られており、忌避された存在として、人々の記憶や記録にも乏しいことがその理由の一つであろう。さらに疱瘡の流行時は非常時であり、生きている人間が優先され、死に至った人間に対しては寄せる関心が希薄になることはある意味しかたのないことであろう。しかし、疱瘡による死者の記憶や記録が乏しくとも、埋もれた墓石は他の死者の墓石と同様にその存在を確かに証明している。

今回の調査研究は、対象とした地域に限られている上、あくまでも古地籍図から推測した「疱瘡墓」の位置と分布である。今後の現地調査を通して、正確な空間的配置を明らかにし、彼ら彼女らが死後に置かれた空間的位置から地域の中での疱瘡患者や犠牲者がどのような立場にあったかについて知るための一助としたい。

本研究の成果は、長崎大学多文化社会学部の研究シーズ育成事業における「近世「疱瘡墓」に関する基礎的研究」(研究代表者:野上建紀)によるものである。

#### 註

- (1) 明治23年(1890)の地籍図にある長野郷は、現在、甲長野・乙長野・協和の3つの郷に分かれている。
- (2) 隔離施設以外で死亡したが、疱瘡に似た症状だったので念のため山中の墓地に埋葬したとも解釈できる。その場合、この記載は疱瘡小屋と疱瘡墓が近接していたことを示すものではなくなる。

#### 引用文献

- 天草町教育委員会 1989『上田宜珍日記 文化五年』  
 犬塚泉 2017「名もなきいしぶみ 被爆無縁仏をめぐって 上・中・下」(長崎新聞 2017年3月7・8・9日掲載)  
 大村市史編さん委員会(編) 2017『新編大村市史』第五巻 現在・民俗編 大村市  
 大村史談会編 1994『九葉実録第一冊』  
 賈文夢 2022a「肥前大村・五島の疱瘡関連石造物について」『多文化社会研究』8号(掲載予定)  
 賈文夢 2022b「長崎・天草地方の疱瘡墓について」『感染症と考古学』発表資料集  
 西海町教育委員会 2005『西海町郷土誌』昭和堂  
 野上建紀・賈文夢 2021a『中尾郷の近世・近現代墓-2020年度「波佐見町文化的景観」に関する基礎調査(中尾山墓地編)-』長崎大学多文化社会学部  
 野上建紀・賈文夢 2021b「波佐見中尾山の「疱瘡墓」について」『金沢大学考古学紀要』第42号 113-134頁  
 野上建紀・賈文夢・石橋春奈・田中正幸 2022「長崎県時津町元村郷の「疱瘡墓」調査」『多文化社会研究』8号(掲載予定)  
 野上建紀・賈文夢・石橋春奈 2022「五島列島の疱瘡墓について」『多文化社会研究』8号(掲載予定)  
 東昇 2009「近世肥後国天草における疱瘡対策-山小屋と他国養生-」『人文』京都府立大学学術報告第61号 143-160頁  
 松本教夫 1981「高浜の疱瘡について」『西海辺記』2 天草民俗研究会 27-38頁



図1 波佐見町位置図

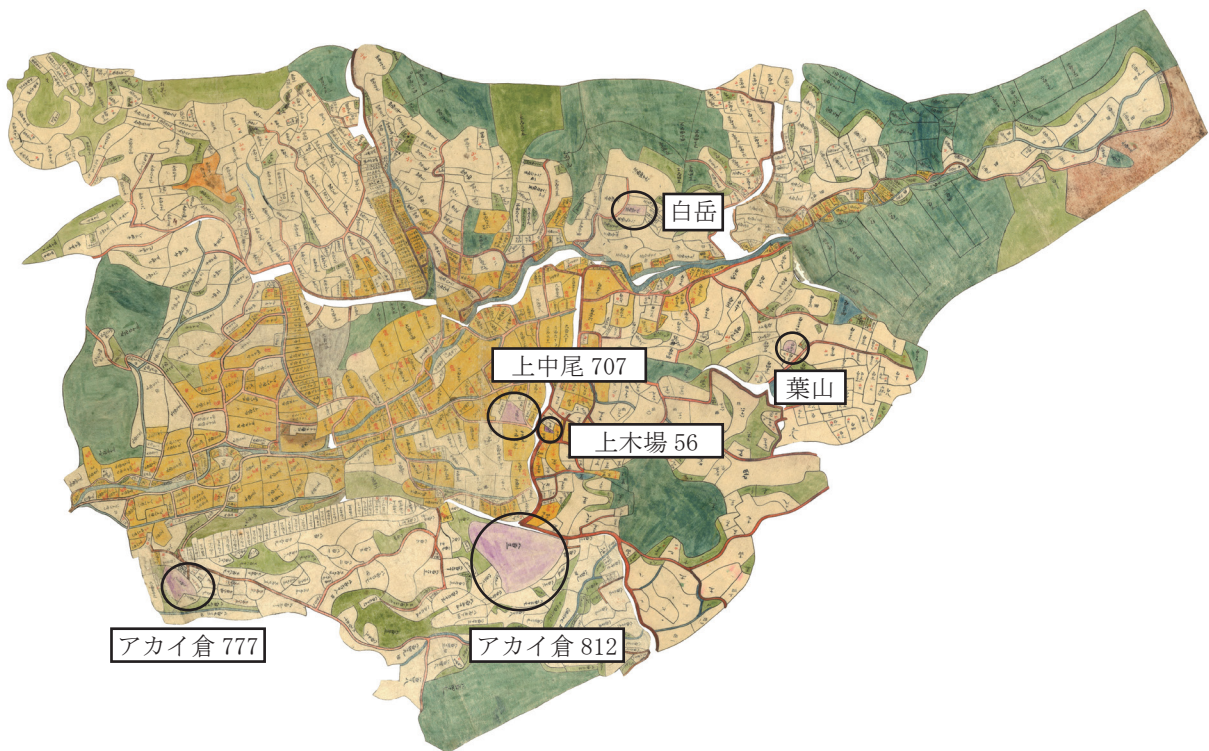


図2 中尾郷の地籍図 (明治23年地籍図にみる墓地の位置図)



図3 前島の疱瘡墓（長崎県五島市）



図4 柴山宝塔と疱瘡墓（長崎県西海市）



図5 時津元村郷の疱瘡墓（長崎県時津町）



図6 福江島南河原の疱瘡墓（長崎県五島市）



図7 中尾郷白岳の疱瘡墓（長崎県波佐見町）



図8 中尾郷葉山の疱瘡墓（長崎県波佐見町）



図9 田ノ頭郷裏ノ谷の疱瘡墓（長崎県波佐見町）



図10 折敷瀬郷東舞相の疱瘡墓（長崎県波佐見町）

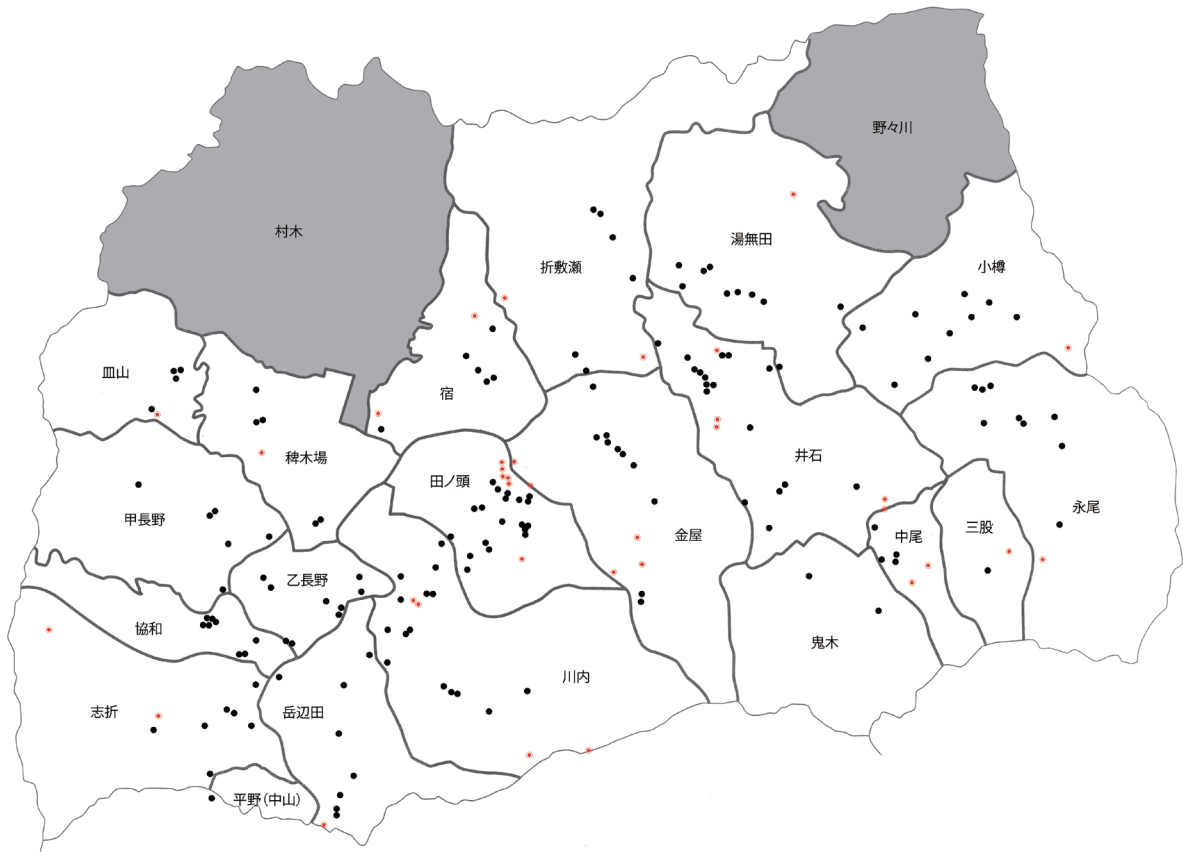


図 11 波佐見町の「郷」の位置範囲図と墓地分布図

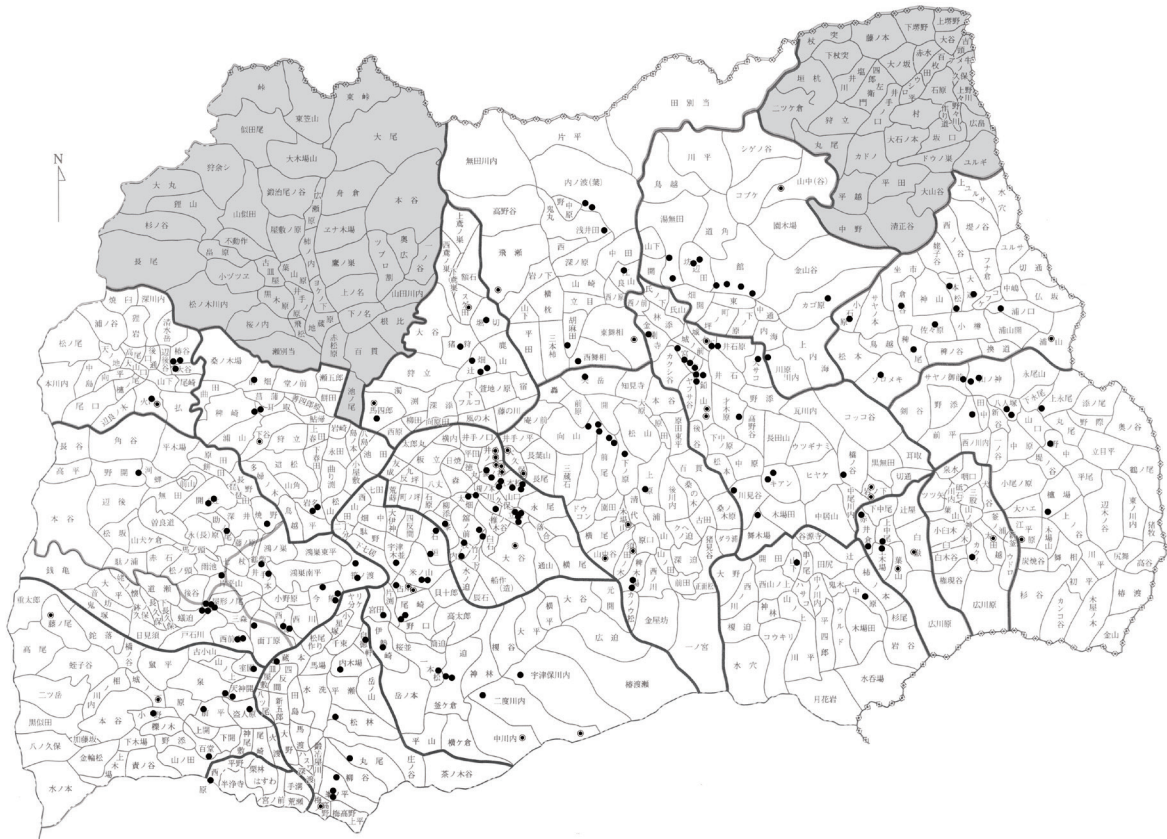


図 12 波佐見町の「字」の位置範囲図と墓地分布図



図13 波佐見町の衛星画像と墓地分布図 (○は疱瘡墓の可能性のあるもの)



図14 折敷瀬郷東舞相墓地



図15 田ノ頭郷裏ノ谷墓地



図16 小樽郷浦山墓地



図17 川内郷中川内墓地



图 18 川内郷二度川内墓地



图 19 志折郷藤ノ尾墓地



图 20 井石郷岩ノ下墓地



图 21 金屋郷須田ノ木墓地

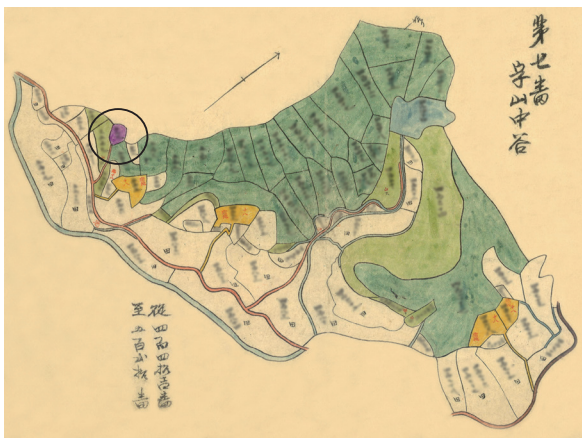


图 22 金屋郷山中谷墓地



图 23 岳辺田郷梅ノ高野墓地



图 24 田ノ頭郷井手ノ平墓地



图 25 皿山郷火口墓地

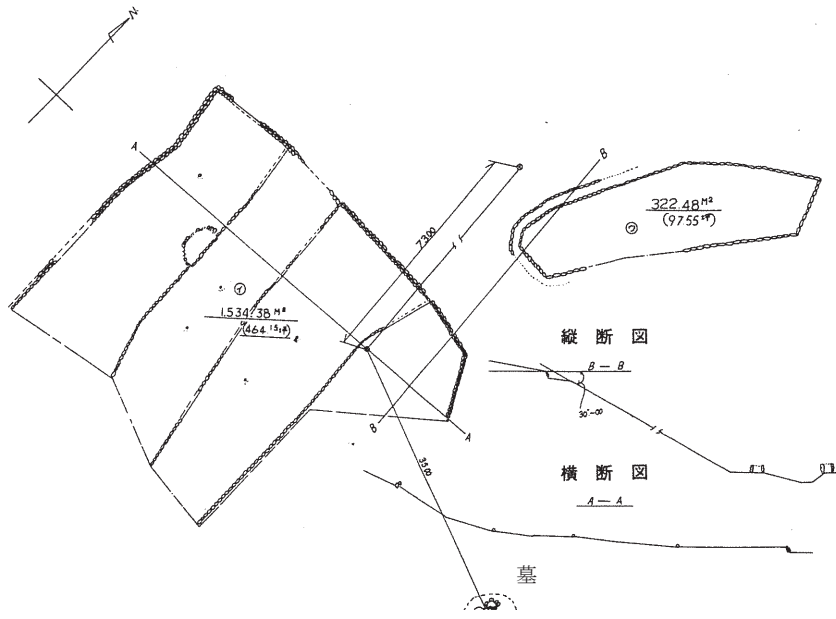


図 26 貢山測量図 (松本 1981 より転載)



(1947年5月13日撮影)



(1965年10月10日撮影)



(1973年5月10日撮影)



(1975年3月3日撮影)

図 27 貢山周辺航空写真 (国土地理院)